

東北地区サイエンスコミュニティ研究校発表会

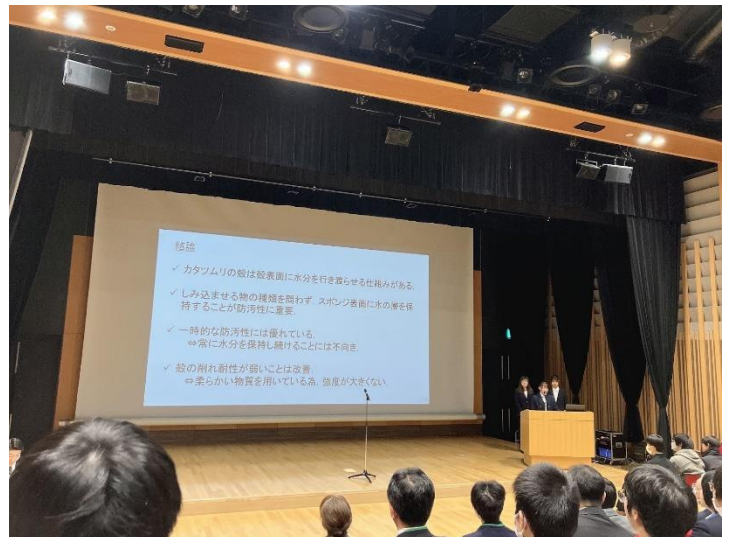
〈概要〉

令和5年度東北地区サイエンスコミュニティ研究校発表会が1月26日と27日の2日間、秋田市にぎわい交流館 AU(あう)で行われた。東北地区にある SSH 指定校16校が参加し、各校の代表者が、取り組んできた課題研究についてポスターセッション形式で発表し合った。仙台一高からは、三つのグループが発表会に参加し、自らの研究成果をポスターを用いて発表した。活発な質疑応答も目立ち、会場は大いに盛り上がった。

〈主な活動内容〉

〈1日目〉

午前9時頃の新幹線で仙台駅から秋田駅へと移動した後、13時から18時まで仙台一高の「カタツムリを超えるやわらかい防汚材料の研究」を含んだ東北6県計16グループによる口頭発表が行われた。スライドによる発表がメインで、発表の内容としては、全体を総じて科学を実生活に応用するための研究や生物の真実を解明しようとする研究など、専門知識が必要となりそうなものが目立った。仙台一高の生徒からも多くの質問の手が上がり、積極的に参加している様子だった。



〈2日目〉

午前中にかけて、全28グループのポスターセッションが行われた。仙台一高からも2つの班が参加し、研究の取り組みや成果を発表した。聴衆とより近い距離での発表となったため、1日目に比べてより活発な質疑応答が行われた。タブレット端末を用いた映像や、QRコードを読み込んでのスライド提供など、近い距離を活かした発表方法を取っているグループも多く見られた。終了後には閉会式が行われ、国立研究開発法人の先生から講評をいただいた。

夕方新幹線で一同は仙台に戻り、充実の2日間を終えた。



〈参加者の感想〉

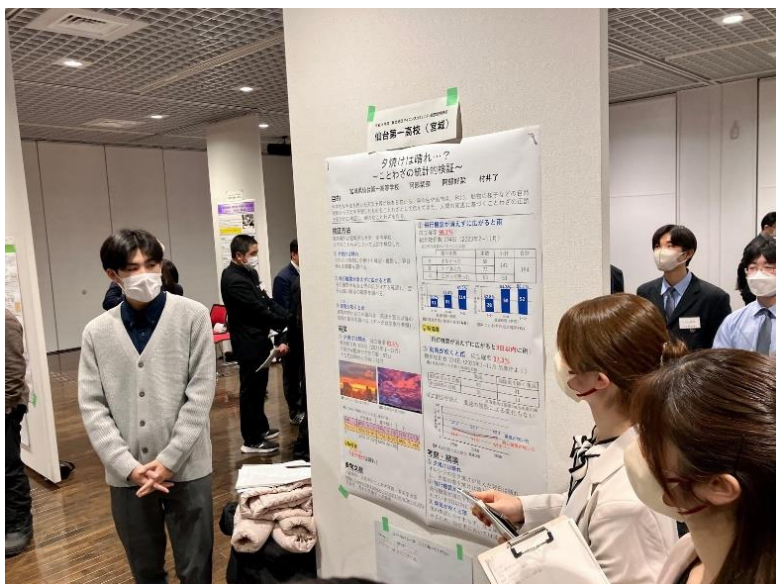
今回は、聴衆としての参加であった。

原稿を見ながら発表している班とそうでない班には発表内容の伝わり方にやはり違いがあった。発表を聞いている立場からすると、発表者からも「見られている」という意識は、発表に向き合う熱意をより強めるための理由になると感じた。口頭発表の際にレーザーポインターを使用しているところがあり、良いアイデアだと思った。また、全体を通して、早口で聞き取りにくい班が多数見受けられた。時間が限られている中での詳しい説明など、話したいことがたくさんあるという事は分かるが、ゆっくりハキハキと話すなどの基本が、聴衆に伝える上では大切な事だと感じた。

今回はポスター発表に参加した。声に抑揚をつけたり、間のとり方を工夫したりして、発表を聴いている人への伝わりやすさを第一に考えた。ポスターのレイアウトにも力を入れ、見てすぐに理解できるようなものにした。二回目の発表からは緊張がなくなり、発表を楽しむ余裕も出てきた。また、質疑応答の時間に、他校生や先生方から多くの質問やアドバイスを頂いたことで、研究への理解がより深まった。

他校の研究発表に刺激を受け、様々なことを学べるいい機会となった。今後の研究にも活かせる学びが得られて嬉しい。更に自身の研究を高めていきたいと思った。

東北地区のSSHの高校生が集まったことで、その地区特有の課題に向き合う発表が多く面白かった。また、様々な発表を聞いたり、質疑応答で意見を交わしたりすることで新たに学べたことも多くあり、今後の研究活動へのとても良い刺激となった。



〈編集後記〉

各校の代表者、代表グループが集結したこともあり、発表の資料や内容だけでなく、質疑応答の質の高さも感じられた。質問では研究の核心にせまる鋭い質問が多く見られ、それに対する受け答えも説得力のあるものが多かった印象だ。良い発表から吸収したものを一高生全員で共有し、よりレベルの高い課題研究活動へと活かしていければ、と感じる。